

竹中幼稚園における紙芝居の活用

—戦前の所蔵紙芝居について—

溝手恵里

(倉敷市立短期大学)

1 はじめに

竹中幼稚園は、倉敷市街では倉敷幼稚園(1887年)に次いで設立された歴史の古い私立幼稚園である。数年前から園に残された古い資料を調査していたところ、昭和初期から戦後にかけての教育紙芝居が発見された。これらの紙芝居の活用が当園でどのようになされていたかを検証するのが本研究の目的であるが、今回はまず、所蔵作品の中でも、戦前に発行された紙芝居に焦点を当て、これらの貴重な資料を整理し、各作品について、若干の考察を加えたい。

2 竹中幼稚園の概要

竹中幼稚園は、1922(大正11)年9月1日、岡山県倉敷市新川の倉敷仮教会堂において、開園された。園長は竹中みつ、最初の園児は約20人であった。翌年3月、旭町(現鶴形)倉敷基督教会新会堂に移転し、旭幼稚園として認可されたが、1924(大正12)年10月13日から、第二代牧師、故竹中悦蔵氏を記念して竹中幼稚園と称されるようになった。1953(昭和28)年より宗教法人日本基督教団倉敷教会付属幼稚園、1980(昭和55)年より、学校法人竹中中学園竹中幼稚園として認可され、現在に至っている、キリスト教の宗教教育を中心とした幼稚園である。

3 竹中幼稚園所蔵の紙芝居について

竹中幼稚園所蔵の紙芝居の中で、戦前発行のものについては表1に示す通りである。まず1の「ヨキヒツジカイ」(新約聖書 ルカ伝15章3-7、ヨハネ伝10章1-8)は「日本日曜学校協会」が「少年伝道」に紙芝居を活用することを決議して刊行した5巻の「日曜学校紙芝居」の一つである。(写真1)これはB5判程度の用紙に線画の各場面を謄写印刷したもので、活用する者がいわばぬり絵式に彩色し、厚紙を張り合わせてから、活用するものである。(上地ちづ子、『紙芝居の歴史』、久山社、1997参照)絵は構図が大胆に変化があり、街頭紙芝居の手法である部分的なアップも取り入れられ、効果的な表現がなされている。文章は、キリスト教児童文学作家の小出正吾が書いており、会話が効果的に配置され、理解しやすい文章である。

2の「ヨナ物語」(旧約聖書 ヨナ書)、3の「ヨセフ」

(旧約聖書 創世記第37章-44章)、4の「放蕩息子」(新約聖書 ルカ伝第15章11節-32節)は、今井よねが設立した「紙芝居刊行会」から出版された「聖書物語」シリーズ12巻の内の第7巻、第9巻、第10巻である。「今井よね(1897~1968)は、1930(昭和5)年、東京の下町に現れた街頭紙芝居に触発されて、キリスト教児童伝道に紙芝居を取り入れた。急激に人気沸騰した大衆児童文化としての街頭紙芝居には、当時、批判も高まっていたが、今井の紙芝居活動は英断と積極性にあふれていた。その紙芝居活動は、営業を目的とした街頭紙芝居に対して、教育的な活用をはかる教育紙芝居の源泉としても評価されるものである。」(上地ちづ子「今井よねの出版紙芝居と紙芝居観」、『日本のキリスト教児童文学』国土社、1995)とあるように、今井はキリスト教の伝道に、紙芝居を精力的に取り入れ、その普及に貢献した。教育紙芝居の誕生に大きく関わった人物である。これらの紙芝居は今井が編集し、脚本を書いている。内容は、聖書の有名な話を忠実に表したものである。そして、絵は三浦浩によるものだが、街頭紙芝居の絵とは違い、芸術的要素の高い絵である。しかし、子どもにとってはすぐには理解し難い絵に思われる。

「ヨナ物語」は表紙の文字が、左から書かれたものと右からのものが混在しており、当時、書き文字の向きが移行中であったことが推測され、興味深い。(写真2)

「ヨセフ」は8章にわたる内容の「大要を、然も、児童に興味ありそうな場所を選んで、編じたもの」であるので、話が長く、冗漫な感がある。「放蕩息子」は謄写版印刷であることが特徴であるが、そのせいか遠見の効かない場面がある。このように、初期の教育紙芝居の模索の過程が見られ、興味深い。

他に、このシリーズには街頭紙芝居画家の板倉康雄、キリスト教関係誌に挿画を描いていたといわれる柚月芳、平沢定治がいた。彼らについて、上地は「柚月は少年少女向きの叙情性ある作風をもち、平沢は輪郭のはっきりした童画タッチで、三浦は品格と説得力のある絵画を得意としていて、いずれも街頭紙芝居家ではないようだ。」(「今井よねと福音紙芝居」、『児童文学研究第20号』、1988)と述べている。

5の「クリスマスの薪」は1938(昭和13)年7月から今井が刊行した新シリーズの一部で、「アルサスの伝

説」とあるように、聖書からの直接の取材ではない。サンタクロースも登場し、子どもの興味を惹きやすい内容である。絵も鮮明で、理解し易い。以上の5作品は、今井が関わったキリスト教系の出版された教育紙芝居である。

6から12は、高橋五山の創立した全甲社の紙芝居である。高橋は幼児を対象として、1935年から「あかづきんちゃん」(大村主計・脚本 日向マコト・画)を第1巻として、「幼稚園紙芝居」を刊行する。彼により、紙芝居が保育教材として利用されるようになったのである。また、平行して、仏教紙芝居の刊行も行ったといわれる。(上地、『紙芝居の歴史』、久山社、1997参照)

6の「花咲ちぢい」はシルエットを効果的に使い、彩色された場面を際立たせている。7の「トンマなトンクマ」は6と同じ画家だが、漫画調である。他の作品も昔話や有名な話が多く、「さしこみ」なども使われて、秀作が見られ、幼児向けの紙芝居の基礎的な形が成立しているようだ。

13と14は松永健哉らによって設立された「教育紙芝居協会」によるものである。これらは、同協会の中で、保育紙芝居に中心的に関わっていた川崎大治の作品である。特に、「太郎熊と次郎熊」は「名作として、

戦中戦後、増刷新版発行をかさねて、どれほどたくさんの子どもの喝采を得ているかわからない。ここには兄弟愛、やさしいおじいさんの愛情が、金もうけだけの見世物小屋のおやじと対比され、つらい苦しい事件を経てしあわせを獲得するありさまがドラマティックに展開する。」(子どもの文化研究所編『紙芝居 創造と教育性』童心社1978)といわれている。戦後版は松山文雄画だが、これは宇田川種治画で、川崎作品の特徴といわれる「さしこみ」が、効果的に使用されている。彼によって、幼児向けの紙芝居の世界が拡大されたことを証明されたといえる作品である。

4 おわりに

以上、竹中幼稚園の所蔵紙芝居の中から戦前のものを概観した。今回は各作品を簡単に解説するに終わったが、部分的ではあるにしても、キリスト教の福音紙芝居から、それに触発されて生まれた幼稚園紙芝居、そして日本教育紙芝居協会の功績といった教育紙芝居の歴史を、具体的な作品を通して、辿ることになった。これらの作品には、資料として、貴重なものも含まれており、今後より詳細に検討して、教育紙芝居の歴史的考察を進めていきたい。

表1

竹中幼稚園所蔵紙芝居(戦前)						
	題名	作者	画家	発行年月日	発行所	備考
1	ヨキヒツジカイ	小出 正吾	袖月 芳	1933.1 (昭8)	基督教出版社	日本日曜学校協会編 日曜学校紙芝居
2	ヨナ物語	今井 よね	三浦 浩	1934.3.20 (昭9)	紙芝居刊行会	
3	ヨセフ	今井 よね	三浦 浩	1934.5.6 (昭9)	紙芝居刊行会	
4	放蕩息子	今井 よね	三浦 浩	1934.9.25 (昭9)	紙芝居刊行会	
5	クリスマスの薪	今井 よね	平澤 定治	1939.11.25 (昭14)	紙芝居刊行会	アルサスの伝説
6	花咲爺	高橋 五山	日向 マコト	1935.5.28 (昭10)	全甲社	濱田廣介監修
7	トンマなとん熊	濱田廣介 監修	日向 マコト	1936.2.20 (昭11)	全甲社	
8	かぐや姫	高橋 五山	千地 琇	1936.8.31 (昭11)		幼稚園紙芝居第8集
9	カラスカンベエ	高橋 五山	中川 治男	1939.8.5 (昭14)		幼稚園紙芝居第14集
10	良寛さん	内山 憲尚	丘 みどり	1940.9.15 (昭15)	全甲社紙芝居刊行会	
11	サルトカニ	内山 憲尚	油利 聖吉	1941.11.20 (昭16)	全甲社紙芝居刊行会	
12	ブンブク茶釜	山田 巖雄	中川 ハルヲ	1942.7.20 (昭17)	全甲社紙芝居刊行会	
13	太郎熊と次郎熊(前編)	川崎 大治	宇田川 種治	1942.12.25 (昭17)	日本教育紙芝居協会	
14	クジャクトスズメ	川崎 大治	羽室 邦彦	1943.2.15 (昭18)	日本教育紙芝居協会	

写真1



写真2

